

険しい道を選べ

首都師範大学 何東

詩人として有名な相田みつをさんは、「雨の日には雨の中を、風の日には風の中を」という言葉を残した。「自ら安全な場所を放棄し、わざわざ困難を突っ切りに外へ行く」、これはその言葉の意味だと思う。かとうさん、その言葉をあなたに贈りたい。

夏休みに入った最初の頃、あなたはあんなにバリバリやっていた。勉強もそれ以外のことも。この休みをいかそうと、学業のほかに様々なコンテストにも参加した。熱心に資料を集めたり、周りの人に意見やアイデアを聞いたりして、ずっと部屋に引きこもってコンテストの作文に取り組んでいた。あなたが作文を書くことが苦手な人だってことは知っている。それなのに自分を奮い立たせ、無理やり自分を困難に向かわせることは、とても素晴らしいチャレンジだと思う。三日もかかってやっと終わらせた時、心地よい笑顔が顔に広がったことは今でも覚えている。自信に満ちてすぐ指導の先生に提出してわくわくしながら先生のアドバイスや褒め言葉を待っていた。

たぶんあなたも予想できなかったであろう。その先に待つのは先生の褒め言葉ではなく、完全な敗北だった。「課題の趣旨からはずれている」、「テーマといかに関連させるかは難しいかもしれません」と先生に言われた。あの瞬間、世界が崩れた。あなたは根本的にテーマを間違えていた。今更。気づいたのはちょっと遅かった。これから自分の力作、いや、失敗作を捨ててもう一度考え直し新しい文章を書くしかなかった。心を込めて書いた文章はゴミになってしまうなんて、あなたにとってはまさに青天の霹靂だったんだろう。そのつらい気持ち、私も分かる。いいえ、私だからこそ理解できる。

退屈な日々を繰り返し、面倒くさいと思ってやめようとしたのか。夏休みの時間はまだまだたくさんあるので、気が緩んだのか。あなたは文章を書き直す予定を何度も延ばし、毎日ただ小説や漫画を読みふけていた。人生において、時が経てばなんとかなるという考えを持つのは一番の禁物。こうやって何も進まずコンテストのことを忘れるほど楽な夏休みを送ってきたが、実はあなたは、先生に会うことをずっと怖がっていた。あなたは気が弱かったから、歩きやすい道に逃げたということをよく知っている。だから添削して下さった指導の先生に会うのをとても恥ずかしく感じた。

新学期が始まり、避けるに避けられなかった。あなたは授業のあと、先生に呼ばれた。あの日はコンテストの締め切りまであと二日だった。頭の中がごちゃごちゃしてしまって口を開くと、謝罪の言葉ばかりだった。「うちの学校から参加者がいないのはとても残念ですね」と先生は言った。その言葉を聞くとどこからか責任感と自責の念が胸にわいてきた。「私のせいで、こんなことになってしまった」と思いながら、あなたは思わずこう言った、「まだ間に合いますか」。「もちろん、間に合いますよ」と答えてくださった。まだ不安だったが、そのときに思い切ってまたコンテストに挑戦すると決心した。これも予想できないことだろう。いつも文章を書くことに悩んでいるのだから。しかし、必死で考え、必死で書いた。文法や表現は間違っているかもしれない。とても優れた作文とは言えないかもしれないが、新たな作文が完成した。やってみなければあなたは自分の実力もわからなかっただろう。

もうおわかりだと思うが、私の名前は「かとう」だ。そう、この言葉は私自身へのメッセージだ。雨の日には雨の中を、風の日には風の中を、コンテストの日にはコンテストに。日本語の勉強も同じだと思う。やさしくて普通の勉強方法に拘らず、常に険しい道を選び難しいことにチャレンジしてはじめて、実力がつく。今回の経験をくれぐれも忘れないでくださいね、かとうさん。